

## 今、親が困っていること、悩んでいること

会報の発行が11月例会当日になり、例会の告知が行き届きませんでしたので、参加者は飯島さんと浅井の事務局2人。

そこで、飯島さんが関わっている『常盤平母の講座』について、お話をうかがいました。

### 常盤平母の講座とは？

常盤平幼稚園 (<http://tokiwadaira-yochien.com/>) の創設者である森口清さんが、子どもが幼稚園を卒業しても、母親たちが人間とは何かを学ぶ場を、地域で子どもたちの教育のことを考える場をつくったらとPTAに投げかけて、母親たちがつくったのが「常盤平母の講座」。一時休眠状態だったが、1990年頃に再開した。

人間を求めて  
人間の真の生き方とは何か  
私たち自身の生き方の問題として  
求めつづけていく  
—これが母の講座の趣旨です—

常盤平幼稚園を卒業した子どもたちの親でなくても、地域の人たち誰でも参加できる。その時その時の話し合いで、いろいろな企画を立てる。

先日開いた会は、新しく小学校に入ったお母さんたちにも声をかけて集まってもらった。小・中・高という時代は、どんどん子どもが親から離れていく時代でもあるし、子育ての悩みは経験者から話を聞いたりして悩みを解決できるけれど、学校の問題となると、大勢の人が口を開かないとなかなか解決していかない。おかしいと思ったことを言っていないと。

参加されていた方の中に、先生とのパイプ役としてPTAのクラス委員があるということをしきんと把握してやっているお母さんがいてよかったなと思いました。パイプ役になる委員さんがいないと、「あの先生はね…」で終わってしまう。「こういうふうに思っているお母さんがいるのですが、どうですか」と先生に投げかけることをしていかないと、お互いに子どもたちのためによくない。強権的な若い先生が増えているとお母さんたちが言っていました。子どもたちを静かにさせるために…。それを子どもから聞いて親たちが「あの先生はね…」で終わらせてはダメ。クラス委員が親と先生のパイプ役になるということ、PTA全体で研修などを通して共有しないといけない。常一小PTAでは、運営委員会でも話をしてきたし、広報でも取り上げてきた。それを受け継いでいってほしいが、最近は研修会がなかなかできなくなっているようだ。

常盤平幼稚園PTA経験者は、幼稚園でのクラス会の積み重ねがある。どういうクラス会にしましょうかというところから、クラスのお世話係が先生といっしょに作っていく。先生と話し合って保護者会のテーマを決めていく。常盤平幼稚園PTAに会長はいない。連絡会という全体のお世話係の会もある。連絡会では、各クラスの様子などを話し合う。

小学校のPTAで言えば広報委員会などの専門委員会にあたるような各係がある。さらまっぼの会の係とか、白鳥の小箱の会の係、図書係、絵本の会や平和の会の係などいろいろあ

る。これをやりたいなと思う人がやるんです。趣味的なものではなく、学習を目的としたPTA内のサークルのようなものでしょうか。各会に参加した人が全員で運営していく。各会の世話人が全体で集まる月例会もある。常盤平幼稚園のPTAはそういうPTAです。

### お母さんたちが集まる場所、学習する場所を提供しつづけたい

母の講座では年初に総会をやって企画を話し合い、年間計画をだいたい決めます。飛び込みで学習会を計画することもあります。今年度は9月に「明日の自由を守る若手弁護士の家」の弁護士さんを講師に呼んで集团的自衛権についての学習会をしました。

母の講座を始めたころは、そうそうたる講師の方たちを招いています。教科書裁判の家永さんや『橋のない川』の住井すえさん、憲法学者の杉原泰雄さんなど。杉原先生は常盤平幼稚園の理事でもあるので、何度か憲法学習をしていただいています。長いお付き合いです。

今 母の講座のお世話係をする人が減ってしまっていますが、お母さんたちが集まる場所、学習する場所を提供するという意味で、継続してやっていこうと考えています。

今年はお母さんたちが集まる会を6月と10月に開きました。10月の会では、私が松Pの例会で聞いた石澤先生のお話を報告しました。参加されていたお母さんたちは皆驚かれました。「アンテナを張っていないくちは駄目ね」「子どもを学校に送り出しておしまいではダメね」と。「挨拶がきちんとしている子が目立つ。それも目を合わせないで機械的に挨拶している。挨拶しているいい子が多いと思っていたのだけれど、そうではないんですね」というお母さんもいました。

12時からお迎えの時間まで開催して、全部で十数人参加されました。

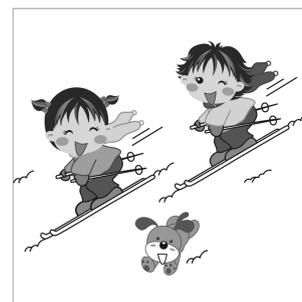
こういう会の報告をまとめて、学期に1回くらい会報も出しています。

ストレス社会の中で、話し合うことが難しい時代になっていて、相手がどう思うかと気にしないで話ができるこういう場を求めている。学校の保護者会でなかなか話せない。学校の様子もあまりわからなくて、子どもから一方的に聞くことになるので、どうしても先生批判になってしまう。他のお母さんの話を聞いて、元気をもらって帰るお母さんもいる。

常盤平幼稚園には結構いろいろな地域の方が集まってきているので、他の小学校のお母さんの話も聞ける。そうすると今まで当たり前だと思っていたことが、他の小学校では違うというような気付きができる。当たり前だと思っていたこと、言っても無駄だと思っていたことでも、嫌なことは嫌と率直に語ることで事態も変わることに気がつく。そういう話しあいの場所は本当に必要。本来は小中学校のPTAでもそういう話しあいができるればいい。親の思いを先生に届ければ、先生も「そうだったのか」と気づく。PTAはそういう場所。

今、働いている人が多いので、PTAの委員決めも大変と聞かが、工夫すれば働いている人もかかわれる。広報でも原稿を入力するのは夜家でもできるからと、働いている人が積極的に引き受けてくれたりと。

——できる人ができることを担いながら、それでも全くできない人もいる人がいるということを知れば…。登録制で、卒



業までに1回はPTA委員をやるというのでは、それぞれ個別の事情があるということを目に見なくなってしまうのではないか。

卒業するまでに一回はPTAに委員として関わりたいねとそれは目標。でもそれを義務としてとらえるようにして、強制してはならない。

—あの登録制が出てきた背景には、PTAの委員をやる人が毎年同じ顔ぶれで、やらない人が卒業するまで一回もやらない、それは不公平だという意見がある。

働かなければ食べられない人がいて、その人に無理やり出て来いという方が不公平ではないか。本当の平等というのは同じ条件がそろっている話。

—前提になっている生活を平等にしてから言ってくれという話ですよ。親をとりまく状況は一段と厳しくなっているのかもしれない。今の若い親の世代の所得格差は大きいと思う。うちの子どもたちは共稼ぎしなくては生活できないし、子どもが生まれたら貯金などする余裕もない。一人親家庭も多くなっているし…。

(まとめ：浅井ゆき)